様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３４４１９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７００５４

研究課題名（和文）植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Study of Merchant Houses in Colonial India

研究代表者
豊山　亜希（TOYOYAMA, Aki）

近畿大学・国際学部・講師

研究者番号：４０５１１６７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：イギリス統治下のインドで植民地経済への参与で大きな成功をおさめた２つの商業カースト、マールワーリーとチェッティヤールは、故郷の集落に大邸宅を競うように建てた。本研究はその様式的変遷を通して、植民地インドのアイデンティティ変容を実体的に把握することを目指した。その結果、1920年代に反英運動が盛り上がるにつれ、イギリス製顔料や建材をボイコットして日本製品を積極的に消費して商家建築が建てられていたことがわかった。つまり、インド独立運動の活発化には、イギリス製品排斥運動とそれに連動した日本製品を消費する商業カーストの行動があると結論づけることができる。

研究成果の概要（英文）：Mercantile communities such as Marwaris and Chettiars are known for their success in colonial economy in British India. This study researched their residential mansions that were constructed between the 1830s-1930s in respective home villages. While the mansions were initially decorated with traditional materials and motifs, interwar period saw drastic changes in this trend. With the increase of anti-British movement, murals and tile decorations in those mansions were executed with made-in-Japan materials rather than British ones because the movement encouraged Indian people to protest British goods. Therefore, this study concludes that Indian nationalism was impacted by the consumption of Japanese goods by Indian people as shown in merchant houses.

研究分野：美術史

キーワード：インド　戦間期　商家建築　タイル　日本　ナショナリズム

１．研究開始当初の背景

（１）研究対象の概要

本研究は、イギリス統治下にあった 19 世紀から 20 世紀前半のインドにおいて、植民地経済への参与で大きな成功を収めた２つの商業カースト、すなわち北インドのマールワーリーと南インドのチェッティヤールが、獲得した富を財源として故郷の集落に造営した邸宅建築群の変容に関する比較考察を行うため着想したものである。

19 世紀のインドはイギリス統治の本格化に伴い、宗主国へ供給する綿花など商品作物の栽培地として開発が進められた。村落部の農業生産者と外国商社を媒介するブローカー業や貸金業を営み、植民地経済の発展に貢献したのが、商業カーストの人々であった。特に、北インド・ラージャスターン地方出身のマールワーリーはカルカッタとボンベイ、南インド・タミル地方出身のチェッティヤールはマドラスにそれぞれ進出し、大きな成功をおさめた。両コミュニティはいずれも植民地期、経済的成功によって得られた富で、故郷に豪華な大邸宅を建設した。1830 年代頃から約１世紀間にわたって造営された点や、ファサード彫刻・壁や天井の彩色画といった要素が時代を経るにつれて西洋美術の影響を強める点で、両者は共通する。これは、それまで隔絶していた地域同士が、植民地支配によって価値観を共有するようになる過程―すなわち多元的なアイデンティティ構築の過程―を可視化していると考えられる。

（２）研究開始当初の先行研究と課題

本研究の開始時点までの主な先行研究には、両コミュニティそれぞれの経済機構を明らかにしようとする経済史の成果［Thomas A. Timberg, The Marwaris: From Traders to Industrialists, New Delhi, 1978］と、それらの社会構造を解明しようとする人類学の成果［Anne Hardgrove, Community and Public Culture: The Marwaris in Calcutta, New York, 2004; David West Rudner, Caste and Capitalism in Colonial India: The Nattukottai Chettiars, Barkeley, 1994］があった。そこでは各コミュニティを成功に導いたモラル・エコノミーが本質論的に捉えられており、植民地支配という大きな歴史的変動のなかで彼らの社会関係を捉えようとする視点が欠けていた。また、邸宅建築そのものをテーマとした成果としては、観光案内に近い概説［Ilay Cooper, The Painted Towns of Shekhawati, New Delhi, 2009; S. Muthiah et al., The Chettiar Heritage, Chennai, 2002 ］があるのみであった。そこでは観光開発に重点が置かれ、より土着的な建築・絵画様式を保持する特定の造営例に関心が偏向してきたため、各集落に現存する邸宅の正確な物件数とそれらの造営年代といった基本的理解がそもそも共有されていない状況にあった。

２．研究の目的

本研究の目的は、マールワーリーの邸宅（ハヴェーリー）とチェッティヤールの邸宅（ナットゥコッタイ）それぞれの構造的・装飾的変遷に主眼を置く美術史的アプローチによって、植民地経済という植民者との共犯関係によって成功をおさめた商業カーストが、現代アジア世界を牽引するコミュニティとして、民族や国家といった近代的な自己規定をどのように醸成するに至ったのか、視覚的局面からその過程を明らかにすることにあった。

前述した経済史や人類学の領域においては、第一次世界大戦を画期としてイギリスからの独立機運が高まり、マールワーリー、チェッティヤールともに民族運動家への財政的支援を行うようになったことが指摘されている。他方、彼らの邸宅建築に関する概説は、民族意識が高まった 1920 年代～1930 年代の造営例について、当時流行していた印刷複製画を二次的に複製した壁画が流行したこと、この時期にマールワーリーが製造業という近代セクターへ進出したことを結びつけ、インドが近代国家として歩を進める過程は、彼らが故郷の伝統文化を破壊した過程でもあるとして、伝統と近代を対立軸として設定する。しかし、批判の対象である印刷メディアの図像には、インドの国土を神格化した女神バーラト・マーターなど、むしろ宗教という伝統的価値を強調したものが多く含まれ、伝統と近代は完全な相反関係とならない。

そこで本研究においては、19 世紀前半から 20 世紀の大戦間期に至るまでの造営期間を通して邸宅建設が継続的に行われた集落を対象として、ハヴェーリー、ナットゥコッタイを構成する諸要素を同時代の造形芸術との関係において詳細に分析していくことにより、植民地インド社会のアイデンティティ変容を包括的に解明することを目指した。

３．研究の方法

（１）全体計画

本研究においては、マールワーリーの故郷であるラージャスターン地方シェーカーワーティー地域と、チェッティヤールの故郷であるタミル地方チェッティナードゥ地域において、それぞれイギリス統治期を通して商業カーストの邸宅建設が継続的に行われた集落を１箇所ずつ抽出し、包括的理解の基盤となる基礎資料の作成を実施した。資料作成においては、①各集落における現存例全ての GPS 値を計測し、GIS システムを用いて分布地図を作成すること、②個々の造営例について、使用建材、構造的特徴、彫刻や彩色による装飾の様式的特徴を調査し記録すること、③同時代の建築や絵画との比較を行って造営年代を特定し、集落のなかで空間的変容がどのように進んでいったのかを明らかにすること、の三点に主眼を置いた。そのうえで、マールワーリーとチェッティヤールの邸宅

建設の消長過程と様式的変遷を比較し、植民地インドにおける土着の建築的伝統がそれぞれどのように変容し、その結果として共有される民族意識がどのように立ち現われてくるのかを明らかにすることを目指した。

（２）平成２６年度
初年度は８月下旬から９月上旬にかけて、インドでのフィールドワークに先立ち、イギリスに所蔵されている植民地インドの関連資料を調査した。調査機関はスコットランド国立図書館（エディンバラ）と大英図書館（ロンドン）で、イギリス主導の植民地インドの都市計画において、商家建築がどのように位置づけられているのか、公文書や書簡などの一次資料を中心に調査した。これを踏まえて、マールワーリーの故郷であるラージャスターン州シェーカーワーティー地方と、彼らの移住先であり植民地インドの旧首都であるカルカッタにおいて、平成２７年２月中旬から３月上旬にかけてフィールドワークを実施した。具体的には、シェーカーワーティー地方の集落であるマンダーヴァーにおいて、ハヴェーリーの分布地図を作製したうえで、各物件の構造的・様式的特徴を記録し、造営年代の比定を行うことにより、集落全体の空間変化を時系列的に把握することを可能にした。カルカッタにおいても、マールワーリーが造営した商家建築や寺院建築について、同様の方法論を用いるとともに、イギリスで入手した年代の異なる地図と造営年代を照合して、移住先におけるマールワーリーの社会的プレゼンスの変化を把握した。

（３）平成２７年度
前年度（平成２６年度）に実施したカルカッタの調査成果を踏まえ、これらが一般公開される１０月下旬の大祭の機会に約１週間カルカッタでフィールドワークを行った。商家建築の内部構造や装飾形式に関する詳細な記録を作成したことにより、イギリス統治期を通してマールワーリーの経済力や家族関係や社会的地位がどのように変化したのかを具体的に把握することが可能となった。また、この調査の準備として、８月下旬から９月上旬にかけてイギリスの大英図書館においてカルカッタの都市整備に関する公文書を調査した。チェッティヤールの商家建築に関するフィールドワークは最終年度に変更することとし、その準備として、チェッティヤールの移住先であり、関連資料の所蔵がインド本国より充実しているシンガポールにおいて、植民地政府の都市計画関係文書を調査するとともに、シンガポールに現存するチェッティヤールの寺院や商家建築を調査した。

（４）平成２８年度
最終年度は、チェッティヤールの故郷である南インドのタミルナードゥ州チェッティナードゥにおいて、平成２８年２月下旬から３月上旬にかけて、商家建築が現存する集落カライクディの実地調査を行った。具体的には、カライクディにおけるチェッティヤールの商家建築（ナットゥコッタイ）分布地図を作製したうえで、各物件の構造的・様式的特徴を記録し、造営年代の比定を行うことにより、集落全体の空間変化を時系列的に把握することを可能にした。また、平成２６・２７年度に調査したマールワーリーの商家建築にも共通する構造や装飾形式について、同時代の美術との影響関係を解明するため、マールワーリー、チェッティヤール双方の商家建築に規範を提供したと考えられる藩王国（イギリス監視下で統治権を許されたインドの王国）の建築や美術収集品を調査した。

４．研究成果
（１）マールワーリーの商家建築
マールワーリーは主にカルカッタに移住してブローカーとして成功し、２０世紀前半には製造業へ進出し、現在では財閥企業にまで成長するほどの一族も輩出している。企業家として国内産業の充実を図った２０世紀前半は、インドにおいて独立運動が盛り上がりはじめた時期であり、マールワーリーはガンディーやのちのインド初代首相ネルーなどの独立運動母体である国民会議派へ多額の献金を行っていたことが知られている。彼らの商家建築には、ガンディーやネルーを神格化した肖像画や、インド独立運動のシンボルとなった「母なる女神」像といったプロパガンダ・イメージに彩られていることが大きな特徴であった。先行研究においては、写真やポスター、あるいはそれをもとにした壁画で満たされた当該時期の商家建築は、植民地化以前の伝統建築や絵画を排除したものとして批判される傾向にあったが、本研究の考察結果は、むしろこの段階の商家建築が、マールワーリーのインド愛国主義者としてのアイデンティティを示す重要な現存資料として位置づけられることを示していよう。

（２）チェッティヤールの商家建築
チェッティヤールは、南インドと海路で結ばれた東南アジアの植民地都市を経済活動の拠点とした。シンガポール、ペナン、マラッカなどの地において、チェッティヤールは金融業に従事して、東南アジア開発の資金源として重要な役割を果たした。彼らの自己表象は、マールワーリーとは異なって、移住先の多文化性に大きく影響を受ける一方で、想像される故郷としてのインドの要素を本国以上に強く残すのが特徴的であった。また、故郷のチェッティナードゥ地方の商家建築やそこでの生活様式には、東南アジア的要素を積極的に取り入れ、マールワーリー以上にコスモポリタンな自己表象装置として商家建築を機能させていたことが判明した。また彼らは、東南アジアの経済活動において、中

国系住民による抗日運動を目の当たりにしながら、その余波は彼らにとって対日本のビジネスチャンスをつかむ契機ともなった。そのことは、商家建築の内装・外装材や調度品に、当時の中国系住民が排除しようとしていた日本製品が好んで用いられていることからも明らかである。この点は、先行研究がマールワーリーとチェッティヤールのインド独立運動への参画度について大きな相違を見出していなかったこととは大きく異なる見解である。しかし実態として、日本占領下のシンガポールで結ばれた日本とチェッティヤール社会の雇用や売買といった経済関係が多数存在することが判明し、これまで触れられてこなかった歴史認識を掘り起こすうえで、マールワーリーとチェッティヤールの商家建築における自己表象をさらに比較考察することの必要性が浮かび上がった。

マールワーリーの商家建築にも、１９２０年代から１９３０年代にかけて、日本製の建材が多用されたことは本研究の調査によって判明したが、そこではイギリスへの抵抗としてアジアの一員である日本の製品を消費するという理由があった。チェッティヤールの場合には、日本はイギリス製品排斥運動のなかで、いまだ生産体制が確立しないインド製品の代替品として「国産品」と読み換えられ消費された日本製品という概念はなかったとみられる。こうした違いは、脱植民地化後、マールワーリーが愛国主義的な企業家としてインドで大きな存在感を示していくのとは対照的に、東南アジアからインドへ引き上げていくチェッティヤールという身の処し方にも反映されていると考えられる。

（３）日本製タイルの普及状況

本研究の特筆すべき成果として触れておきたいのが、マールワーリー、チェッティヤール双方の商家建築において、１９２０年代後半から３０年代後半にかけて、日本製の装飾タイル、通称「マジョリカタイル」が大量に使用されていたという歴史的事実の発見である。インドにおいても東南アジアにおいても、当該時期に使用されていたタイルが日本製であるという認識は、現在ではほぼ失われていたが、現存する物件のタイル剥落痕に残るタイル裏面の商標から製造元を特定することに成功した。

上述したように、その使用意図はマールワーリーとチェッティヤールでは大きく異なっていた可能性がある。それを解明することは、現在の日印関係を展望するうえでも重要であると考える。つまり近年、日印関係に関する研究が、インド経済の躍進もあって社会的ニーズが高まっていることを考えると、戦前日本企業のインド市場調査の蓄積を、タイルを通して解明することで、現代の日印経済関係の発展にも本研究の成果が寄与することが可能ではないかと考える。研究期間終了後も、見出された課題を継続的に研究したい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5　件）

① 豊山亜希「戦間期インドにおける日本製タイルの受容とその記号性」『社会経済史学』 82 巻 3 号、pp.35-50、 2016 年、査読有

② 豊山亜希「幻想が作り出す「伝統」―インドの「野外美術館」」『月刊みんぱく』40 巻 8 号、pp.16-17、2016 年、依頼有・査読無

③ 豊山亜希「インドのナショナリズムを「扇動」した日本のタイル」『民族藝術学会会報』88 号、p.5、2016 年、依頼有・査読無し

④ 豊山亜希「インドの近代化遺産とビジネス・コミュニティ」『現代インド・フォーラム』28 号、pp.3-9、2016 年、依頼有・査読無

⑤ 豊山亜希「インドのマジョリカ熱：イギリス統治下のインドにおける日本製タイルの消費について」『美術フォーラム２１』32 号、pp.83-88、2015 年、査読有

〔学会発表〕（計　15　件）

① Aki Toyoyama, “Transaction and Translation of Modernity: Japanese Majolica Tiles in Colonial India”, History of Consumer Culture 2017 Conference: Objects, Desire and Sociability, 学習院大学、2017 年 3 月 24 日

② Aki Toyoyama, “The Tiling of Indian Modernity: Japanese Majolica Tiles in Marwari Architecture”, 45th Annual Conference on South Asia, Concourse Hotel, Madison, USA, 2016 年 10 月 21 日

③ Aki Toyoyama, “The Tiling of Indian Modernity: Japanese Majolica Tiles in Marwari Architecture”, 45th Annual Meeting of Southwest Conference on Asian Studies, University of the Incarnate Word, San Antonio, USA, 2016 年 10 月 15 日

④ Aki Toyoyama, “Modernity, Hybridity, and New Identities: Architectural Representations of the ‘Black Town’ in Late Colonial Calcutta’”, The 4th International Congress of Bengal Studies, 東京外国語大学、2015 年 12 月 12 日

⑤ Aki Toyoyama, “The Tiling of Indian Modernity: Japanese Majolica Tiles in Marwari Architecture”, International Workshop

“Representing Marwaris in 1920s-30s India”, 追手門学院大阪梅田サテライト、2015年10月31日

⑥ 豊山亜希「マールワーリーの近代的アイデンティティとしての日本製マジョリカタイル」日本南アジア学会第28回全国大会、東京大学、2015年9月27日

⑦ Aki Toyoyama, “Japanese Majolica Tiles in Inter-war India: Modernization, Sanitization, and Beautification of the National Landscape”, The 17th World Economic History Congress, 京都国際会議場、2015年8月3日

⑧ 豊山亜希「インドを彩る日本のタイル：インド近代化遺産のもうひとつの物語」第445回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館、2015年8月1日

⑨ Aki Toyoyama, “Japanese Majolica Tiles and National Aestheticism in Late Colonial Asia,” The 9th International Convention of Asian Studies, Adelaide Convention Centre, 2015年7月7日

⑩ 豊山亜希「石窟寺院をめぐる西デカンの長期の景観変容：立地環境・建築様式・装飾形式の分析から」2014年度マハーラーシュトラ研究会例会、東京外国語大学本郷サテライト、2015年3月22日

⑪ Aki Toyoyama, “Japanese Majolica Tiles in the Making of Indian Modernism and Nationalism”, SNU-INDAS Conference, India Habitat Centre, 2014年12月12日

⑫ 豊山亜希「植民地インドにおける日本製マジョリカタイルの受容：公衆衛生、消費、アイデンティティ表象」第262回民博研究懇談会、国立民族学博物館、2014年12月10日

⑬ Aki Toyoyama, “Aesthetics, Sanitation, and Nationalism: Japanese Majolica Tiles in Late Colonial India”, Seminar Series of the Centre for South Asian Studies, The University of Edinburgh, 2014年10月23日

⑭ 豊山亜希「植民地インドと日本製〈マジョリカ〉タイル—公衆衛生と民族意識をめぐる美学」2014年度現代インド・南アジアセミナー、広島大学、2014年9月17日

⑮ 豊山亜希「大戦間期のインド建築における日本製マジョリカタイルの受容とその記号性」社会経済史学会第83回全国大会、同志社大学、2014年5月25日

〔図書〕（計 1 件）

① Aki Toyoyama, “Powers of Altering Sanctuaries: The Excavation and Revival of Minor Rock-Cut Temples in the Western Deccan”, in Verena Widorn, Ute Franke, and Petra Latschenberger, eds., *Contextualizing Material Culture in South and Central Asia in Pre-Modern Times*, Brepols, 2016, pp.253-267.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

なし

６．研究組織

(1)研究代表者

豊山 亜希（TOYOYAMA, Aki）

近畿大学・国際学部・講師

研究者番号：40511671

(2)研究分担者

該当者なし

(3)連携研究者

該当者なし

(4)研究協力者

該当者なし